

東屋の巻の左近少將の待遇法をめぐって

久保重

源氏物語の東屋の巻には、これまでの巻には見られなかった用い方で敬語がつかわれている。具体的に云うと、正五位相等官の左近少將と地下の常陸介（正六位相当）の妻やその連れ子（浮舟）に対して、敬語が地の文にも用いられている。この物語では、地の文で作中人物に敬語が用いられるのは、親王以上の皇族とその家族、臣下では上達部以上とその家族に限られていた。ところが、東屋の巻に入るといきなり左近少將の待遇法で、その法則が破られるのである。これを取り上げてその意味を探って見たい。

玉上博士は源氏物語の敬語を、次の四段階に分けて説いて居られる。^(注1)

絶対敬語。天皇に「奏す」、皇后・皇太子に「啓す」という類。

最高敬語。「宣はす」「仰せらる」「聞えさす」の類で、地の文

では、天皇・皇后・皇太子・上皇にのみ付く。

中間敬語。最高と最低の中間で、種々さまざまな場合がある。

最低敬語。「給ふ」「らる」の類が文末に一つだけ付くとき

場合

標題に取り組む前に、必要な予備知識を整えたい。今の場合、中間敬語と最低敬語とが対象となる。この二者は、一文中における敬語の頻度によって区分されるものであるが、その用法は様様である。次に行こう。

東屋までの敬語の世界

東屋の巻までの、地の文における敬語の用法を、今の場合必要とする中間敬語と最低敬語との範囲内で瞥見して見よう。上達部の家族のうち、君達には、普通の場合は最低敬語を用いるようである。

宮腹の中將（頭中將、従四位）は、なかに親しくなれ聞え給ひて、あそびたはぶれをも、人よりは心やすくなれ／＼しくふるまひたり。右のおとどのいたはりかしづき給ふ住みかは、この君もいともうくして、すぎがましきあだ人なり。（帚木^{注2}括弧内は筆者注）

（夕霧、六位は）さもありぬべきあたりには、はかなしごともし宣ひ触るるはあまたあれど、頼みかくべくもしなす。さる方になどかは見ざらむ、と、心とまりぬべきをも、強ひてなほざりこ

とにしまして、なほかの緑の袖を、見え直してしがなと思ふ心の
みぞ、やむごとなき節にはとまりける。(螢)

かくはかなきこと(蹴鞠)なれど、良き悪しきけちめあるを挑み
つつ、われも劣らじと思ひ顔なる中に、衛門の督(柏木、兼宰相
四位)のかりそめに立ちまじり給へる足もとに、並ぶ人なかりけ
り。かたちいと清げに、なまめきたる様したる人の、用意いたく
して、さすがに乱りがはしき、をかしく見ゆ。(若菜上)

六条院の女君達のうち、紫の上・秋好む中宮・明石の姫君には、
勿論それぞれ程度の差はあるが、頻度の高い敬語が用いられてい
る。玉葛もこの類に入る。一般に姫君は君達よりも敬語段階が上
で、中間敬語が用いられる。

対の姫君(玉葛)こそ、いとほしく、思ひのほかなる思ひ添ひ
て、いかにせむと思し乱るめれ、かの監(大夫の監、太宰府三等
官五位)が憂かりしさまにはなづらふべきけはひならねど、かか
る筋に、かけても人の思ひより聞ゆべき事ならねば、心ひとつに
思しつつ、さま異にうとましと思ひ聞え給ふ。何事をも思し知り
にたる御よはひなれば、とざまかうざまに思し集めつつ、母君の
おはせずなりにける口惜しさも、またとりかへし惜しく悲しく寛
ゆ。(螢)

玉葛は太政大臣光る源氏の養女、内大臣の子であるからこの待遇は
当然なのだ。明石の御方は

(童べなど) 心とゞめ取りわきうゑ給ふりんどう朝顔のはひ交れ

るませも、みな散り乱れたるを、とかく引きいでたづぬるなるべ
し。(明石の御方は) 物あはれに覚えけるまに、箏の琴をかき
まさぐりつつ、端近う居給へるに、御さきおふ声のしければ、う
ちけとなえはめる姿に小桂ひきおとしてけぢめ見せたるいといた
し。(光る源氏は) 端の方につい居給ひて、風の騒ばかりをどぶら
ひ給ひて、つれなく立ちかへり給ふ、心やましげなり。
おほかたに萩の葉すぐる風の音もうき身ひとつにしむ心地して
と、ひとりごちけり。(野分)

彼女が主人の六条院北の町の場面であるから、珍らしく敬語が二つ
ついている。しかし、光る源氏の登場以後は、源氏には敬語(〜
印)が頻出するが、彼女にはまったくつかない。(彼女が今上の女
御の生母であっても受領階層の出身だからである。)この相対的
用法は、特に記憶しておきたい。次は、六条院の女樂の夜の彼女の
容姿を描いた文であるが、ここにも一つの敬語も見当らない。

(源氏の目に映る明石は) 柳の織物の細長、萌黄にやあらむ、
小桂きて、うすものの裳のはかなげなる引きかけて、ことさら
卑下したれど、けはひ思ひなしも心にくく、あなづらはしから
ず。高麗の青地の錦の端さしたるしとねに、まほにもゐで、琵琶
をうち置きて、ただ気色ばかり弾きかけて、たをやかに使ひ
なしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、またありがたくなつ
かしくて、五月まつ花橘、花も実も具しておし折れるかをり、
寛ゆ。(若菜下)

右の文に敬語が見られないのは、源氏との身分差からだ、女三の宮には同じ場面で「人よりけにうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す。」「きさらぎの中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたるこちして、鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見え給ふ。」「御髪は左右よりこぼれかかりて、」「これこそは限りなき人の御有様なめれと見ゆるに」と敬語を落していない。光る源氏と明石の御方の間の子、明石の女御にも、「同じやうなる御なまめき姿」、今すこしにほひ加はりて、もてなしけはひ心にくく、よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりて、かたはらに並ぶ花なき朝ぼらけのこちぞし給へる。」「いとふくらかになり給ひて、なやましく覚え給ひければ、御琴もおしやりて、脇息におしかり給へり。」「紅梅の御衣に、御髪のかかりはらはと清らにて、火影の御姿よになくうつくしげなるに」とあつて敬語はいっぱいつかわれてゐる。紫の上については「葡萄染にやあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に、御髪のためれる程、こちたくゆるるかに、おほきさなどよき程に、やうだいあらまほしく、あたりにほひ満ちたるこちして、花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことに物し給ふ。」と、減らしてあるがそれでも敬語が二つついてゐる。明石の方はずっと最低敬語段階にあつたのを減らしたので無敬語になつたのである。源氏が、女君達を鑑賞している場面だが、一面女君達相互の身分の対比が自ずと表現されている。この、尊敬したり賤しめたりする「待遇法」の基準は、全く、その出自に拠るので、他の価値、たとえば、その才能・経歴・年令・教養・容姿、ま

たこの場面について云えば、光る源氏からの信頼度や愛の濃淡とも無関係な「秩序」である。この場面は、女三の宮は二品内親王、六条院の正夫人。紫の上は親王女、院の女御待遇。明石の御方は播磨前司の女、準女房格という序列で、琴・和琴・箏・琵琶を合奏してそれぞれ技と妍を競うところに、善美を尽した六条院の生活の壮麗さ気品高き音楽文化の水準の高さを描き出しているところである。待遇表現が、大貴族の豪奢の形象化を支えている場面でもある。次に、極めて高位の貴人をあがめる手段として、同席者を無敬語にしている例を見よう。

（源氏）「風の音秋になりけりと聞えつる笛の音に忍ばれてなむ」とて、御琴ひき出でてなつかしき程に弾き給ふ。源中将（夕霧）は盤渉調にいと面白く吹きたり。頭の中將（柏木）心づかひしていだしたて難うす。（源氏）「遅し」とあれば、弁の少將（柏木の弟、正五位）拍子打ちいでて忍びやかに謡ふ声、鈴虫にまがひたり。二返りばかり謡はせ給ひて、御琴は中将（柏木）に譲らせ給ひつ。げにかの父大臣の御爪音をさをさ劣らず、はなやかに面白し。（篝火）

一座のうち、太政大臣光る源氏ひとりに敬語が用いられる。初秋風が涼しい六条院の深夜の奏楽、ここだけが明るい華やいだ御殿、三人の若い君達の無敬語が主の光彩を一層強調する。

この外、地の文で敬語を用いるべき階層の人物に、敬語を除くことによつて、その人物の感覚や心理に読者を密着させ、切迫した感情を表現する例、事物や人物を作中人物の感官を借りて描く例（垣

間見の場面もこれに属する）などがあるが、今は待遇表現だけを取り上げることにした。

次にその人物の身分に相当する敬語段階を超えて、敬語が多く付く場合を一瞥しよう。

地の文の敬語は、作中人物の身分によって、相等する段階がほぼ定まっているのであるが、その人物の相手をする者の身分次第で変化があつて、極めて高位の人と同席する場合には、敬語の数が減り、最低敬語段階の場合は無敬語になる。これと反対に、身分の低い者と同席する場合は敬語の数が多くなり、最低敬語段階の登場人物が、中間敬語段階に上り、中間敬語段階内の人はそのなりに敬語頻度が高くなる。このことは上記の例文中にも見ることができ、特に、女房を相手にしている場合を記憶に留めておきたい。一例を挙げると、

（女房）御厨子によりて、紙一卷、（明石の姫君の）御すずりのふたに取りおろして奉れば、（夕霧、左中将四位）「いな。これはかたはらいたし」と宣へど、北のおとど（明石の御方、姫君の生母）のおぼえを思ふに、少しなめなる心地してふみ書き給ふ。紫の薄様なりけり。墨、心とどめておしすり、筆のさきうち見つつ、こまやかに書きやすらひ給へる。いとよし。されどあやしく定りてにくき口つきこそものし給へ。

（夕霧の和哥、略）

吹き乱れたる刈萱につけ給へれば、人人、「交野の少将は、紙の色にこそ、ととのへ侍りけれ」と聞ゆ。（野分）

夕霧は、君達の身分であるが、これは明石姫君付きの女房達が相手をしている場合なので、敬語段階が上昇している。女房達の目で主人側の人物を見ている場面の描き方の常套である。

また、この物語の作者が作中人物に評を加える場合にも同様の上昇が生じることがある。源氏物語は、語り手の女房、昔光る源氏らに仕えていた女房が、語りきかせる形式で書かれているので、君達について批評したり噂話を挿む時には、敬語の多い言葉となる場合があるのであろう。例を見よう。

道すがらいりもみする風なれど、うるはしく物し給ふ君にて、三条の宮と六条の院とに参りて御覧ぜられ給はぬ日なし。うちの御物忌などにえさらずこもり給ふべき日よりほかは、いそがしき公事節会などの、いとまいるべく事しげきに合せても、まづこの院に参り宮よりぞ出で給ひければ、まして今日かかる空の気色により、風のさきにあくがれありき給ふもあはれに見ゆ。（野分）

例外。

次の文は、女房の評と解することもできず、例外的にここだけ、十才の夕霧に対して敬語が沢山つかわれている個所である。貴族的な少年美を表現する手段として、待遇法を用いたものであろうか。

（夕霧、六位殿上）浅葱の心やましければ、うちへ参ることもせずもの憂がり給ふを、五節にことづけて、直衣など、さまざま変れる色ゆるされて参り給ふ。きびはに清らなるものから、ま

だきにおよずけて、ざれありき給ふ。帝よりはじめ奉りて、思したるさまなべてならず、世にめづらしき御おぼえなり。(乙女)

以上に見て来た通り、待遇法による表現は多種多様であるが、それが、身分に帰するものであることは論をまたない。平安朝時代は、非常に身分制の嚴重な時代であった。それが源氏物語にも反映しているのであるが、物語中の敬語を、特に地の文の敬語を上掲の分類に見る如き、かかる整然たる規制にしたのは、作者の好みに因ると考えられる。「律」に「三位以上謂貴」とある。上達部以上を特別扱いするのは、宮廷の規定を基準にしたのであろう。精緻な特殊の待遇法の枠で緊密に構成せられてゐる作者好みの古代貴族社会、一点不純物の入りこむ隙のない美的虚構世界——東屋の巻までのこの物語の世界を、仮りにA世界と名づけておこう。之に対して「つくば山」で書き起される東屋の巻に出現するのは異質の世界である。敬語組織の格を破ることで、作者は、立場の異なる人人を読者の視野の中に加えた。受領階層などの現実的社會の人人が、A世界の貴族と共存する、それが東屋の巻であり、それに後続する浮舟以降の物語なのだとは私は考える。

東屋の巻の左近少将と敬語

東屋の巻のはじめに、左近少将が、常陸守の継娘(浮舟)の求婚者の一人として登場する時点では、地の文は少将に敬語を用いない。

左近の少将とて、年二十三ばかりの程にて、心ばせしめやかに、才ありといふ方は人にゆるされたれど、きらきらしう今め

いてなどは、えあらぬにや、かよひし所などもたえて、いとねんごろに言ひわたりけり。

少将にはじめて敬語がつかわれるのは、浮舟の母北の方が浮舟にすすめて少将に返り事をさせるところからである。

この御方(浮舟)に取りつぎて、さるべき折折は、をかきさまに返り事させ奉る。

次いで、仲人が北の方から浮舟が常陸守の実子でないことを打ちあけられて、「少将の君に参うで」「しかじかとなん申し」と、ここから地の文に頻繁に少将に敬語がつかわれる。少将の詞をうける時は「と宣ふ」、仲人が少将に語る時は「と申しければ」「と聞こゆ」「と聞こゆれば」「とは聞き給へど……と聞き給へり」であり、そして「思したゆたひたるを」「契りし暮にぞおはしはじめける。」となる。

東屋の巻までのこの物語の地の文の敬語の用法に、鉄則の如きものが存在するのを知る読者は、左近少将と仲人との対話と、乗換事件の顛末とに、この場面だけの破格の敬語のつかい方を結びつけて、下司のをかしさを感じ得るに違いない。作者は戲画的なイメージを頭において、仲人と少将、仲人と守、再び仲人と少将と三場面を書いたかと思われる。守の実子とこそ結婚したいという少将の申出を守が喜んで、財を尽して少将の出世の後見をしようと約束すると、仲人が喜んであたふたと少将の許に向いて行くところ、

……と、(守が)よろしげにいふ時に、いとうれしくなりて、妹にもかかる事ありとも語らず、あなたにも寄りつかで。

守の言ひつる事を、いともいともよげにめでたし、と思ひて、

(左近少将に) 聞ゆれば、……

「寄りつかで。」で文が中絶するのは、画面がさつと変るところ。今日の言え、漫画のページをさつとめくるところの趣があるではないか。

だが、そのおかしさの外に、私は、この場の破格の敬語にもう一つの意味を見る。宿木の巻で最高貴族達の生活世界を見た後、一転して、作者はここに別次元の人人の世界を展開するのだと、私には思えるのである。

東屋の巻の特殊性

東屋の巻の左近少将と並んで、手習の巻で浮舟に思いを寄せる中將も、登場以来常に敬語で語られる。

尼君の昔の聲の君、今は中將にてもし給ひける、おとうとの禪師の君、僧都の御もとにもし給ひける、山籠りしたるをとぶらひに、はらからの君達つねに上りけり。横川に通ふ道のたよりに寄せて、中將ここにおはしたり。

左近少将は二十二・三才、この中將は二十七・八才。(光る源氏は二十二才で大将、夕霧は十八才秋中納言、十九才で右大将、薫は二十三才秋中納言、二十六才二月に権大納言兼右大将。)この平凡な四位五位を敬語で仰ぎ見る階層が、東屋以後この物語の世界に入つて来るのである。左近少将に敬語がつかわれる背景には、少將の浮舟との婚約を破棄した時点で云うと、次の様な人人が居る。どの一人を取り上げてても宿木の巻までには見当らなかった型の人達であ

る。この人人の世界を、便宜上、B世界と呼ぶことにする。(宿木の巻に「あらましき東男の、腰に物おへるあまた」、「下人も数多く」、「声うちゆがみたる者」、「常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺に詣でて戻り給へるなり……」と申すに、「と見えていた。常陸国は親王太守の大国で、太守がいわゆる「遙受の官」で赴任せず、次官の介が任地に赴いて任務を代行するため、介を守ともいうが、もとを糺せば僭称で、「前司」といひ、女を「姫」と称するものも僭越である。地の文がこの様に巻の始発に「介」を「守」と呼んでいるのは、この巻の地合いを早くも視かせているものと思われる。)

常陸守——尊大傲慢で、「守」「姫」と自ら云い人にも云わせたがる俗物、地方で巨大な財を成した成上り。卑俗・無知・無教養・事大主義者。金の力で策を弄したりもする。口車には忽ち乗せられる。実は溺愛するが、妻のつれ子には冷い。

常陸守の北の方——宇治八宮の遺児浮舟の母。八宮北の方の姫。北の方に女房として仕え、浮舟を生んだが、八宮が認知しなかったのを今も怨んでいる。貴族の教養があると自負しているが、長い地方生活が身に染みついて、浮舟に着せる衣裳の好みも田舎風。浮舟の教育も不十分で、音楽を教えておかなかった。夫の無教養を軽蔑し、その無知につけてこんで身勝手をするが、夫の誠実さは認めている。浮舟を姫君と崇め、一切を浮舟の幸福な結婚に賭けている。彼女の強情・短気・身勝手・意地張り・強引・活々とした行動力、これらこそはまさしくB世界の人そのものであろう。

仲人——弁舌と臆面なさで身過ぎをしている。狡猾・無恥・多

弁。

宿木の巻以前のA世界のひとちがつて、B世界の人人は単純で、臆面なしで、自己中心的に、あとさき見ずに行動する様である。

浮舟——「ものにもまじらず、あはれにかたじけなくおひいで」とあるが、A・Bどちらの世界に属する人であらうか。東屋の巻における地の文の待遇法について見よう。(注3)

本文

128頁 あはれにかたじけなくおひいで給へば

母の意識

「今はわが姫君を、思ふやうにて見奉らばやと、

思の心に思う

139 (母)こなたに渡りて見るに、いとらうたげに

母が見る

てみ給へるに、

「さりとて人に劣り給はじ、とは思ひ慰む。

母が思う

144 廊などほとりばみたらんに住ませ奉らむも、

あかずいとほしくおぼえて、

母が思う

145 ここには御物忌と言ひてければ、人もかよはず。

母が、中君の女房に云う。

151 近く候ふ人人にも、いとよく隠れてゐ給へり。

中君が思う

163 汗におしひたして臥し給へり。

乳母が見る

164 わびしければ、うつぶして泣き給ふ。

乳母が見てい

165 「みだり心地のいと苦しう侍るを、ためらひ

て」と乳母して聞え給ふ。

浮舟が中の君に申し上げる

「なにごこちとも覚え侍らず、ただいと苦しく

侍り」と聞え給へば、

166 引き起こして参らせ奉る。

同右

167 いややらかにおほどき過ぎ給へる君にて、お

し出でられてゐ給へり。

中君の女房が見る

「灯の方にそむき給へるさま、

「お前にてえ恥ぢ給はねば、見るたりける。

「向ひて物恥ぢもえしあへ給はず、心に入れて見

給へるほかけ、

中の君が見る

171 思ひくし給へるさまいとあはれなり。

母が見る

180 「いかに聞こゆべきことにか」と、君は苦しげ

に思ひてゐ給へれば、

乳母が見る

181 心やすくしも対面し給はぬを、これかれおし出

でたり。

女房らが、浮舟をおし出す

186 入りおはしたるも恥づかしけれど、もて隠すべくもあらでゐ給へり。

薫が見る

浮舟に敬語がつかわれているのは以上22例。浮舟について思つた

り・見たり・働きかけたりする主体は、母(7)、乳母(4)、女房

(5)、中の君(5)、薫(1)である。母は、昔仕えた故八宮の御女と

いう意識から、浮舟を敬語で待遇したり、我が子として無敬語で扱

つたりする。中の君も、故大君に似た浮舟を妹として親しむ気持か

ら、敬語を混ぜる。乳母と女房は問題外だ。結局、薫の目に映った

浮舟の姿を「み給へり」という186頁のが唯一の破格であるが、139頁

の「あ給へるに」と共に、これが、薫や母の目に映った浮舟の優雅な容姿の貴族的印象を描き出すための、技法として敬語を用いたのであったら、「破格」ではなくなる。

右の22例を除くと、東屋の巻の地の文は、浮舟に対して全然敬語を用いていない。要するに浮舟に関する地の文の敬語は、母と中の君とが、感傷的に八宮の遺児として待遇しているという範囲内のものであった。浮舟はB世界人として設定されているのである。

東屋の巻より以前はA世界一本の物語であったが、東屋ではA世界とB世界の二つの世界が並存関係にあり、中の君・匂宮・薫らの住むA世界に対して、常陸介や母北の方とともに、受領階層としてB世界に属する女として浮舟は物語に登場して来たのである。だから薫は彼女を宇治に隠し据えたのだ。だが、薫の配慮もむなしく、A世界に身をおく運命の下で、浮舟は二つの世界の落差から来る苦をまともに身に浴びることになる。ずっと後に浮舟が死を決意するところで、作者が草子地で「児めきおほどかに、たをたを見ゆれど、けだかう世のありさまをも知るかたすくなくて、おふし立てたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを、思ひ寄るなりけむかし。」という。A世界から見た評である。B世界の人から見れば、全く残酷な言葉である。単純な発想による飛躍した行動しかなかったB世界の女の、それが精いっぱい誠実な生き方だったのだ。

その浮舟の本舞台登場に当って、彼、左近少将は露払いの役をしているのである。一つは、浮舟が読者のつけたその呼名の様に住み

処もなく漂う最初のきっかけを、A B両世界の接点上に作った点において。又一つは、B世界をクローズアップして打出した点において——。左近少将に地の文が付与した敬語の性格を私はこの様に見るものである。

注1 源氏物語評釈別巻一所収「源氏物語のことば」

注2 引用本文は角川文庫「源氏物語」に拠った。

注3 ページ数は同右第九巻「東屋」に拠る。